

〈翻訳〉

## モーリス・アルヴァックス『聖地における福音書の伝説地誌』 第9章 結論 (2)

横山寿世理\*・金瑛\*\*

### 抄 録

---

M. アルヴァックスによる『聖地における福音書の伝説地誌』(*La topographie légendaire des évangiles en Terre sainte*) の結論の一部分を邦訳した。前巻の翻訳に続き、アルヴァックスは、イエスを直接的に記憶できたマタイ・マルコ・ルカ・ヨハネによる福音書が、その後のキリスト教信仰と教義へと伝承されていく中で、集合的記憶が形成されたことを実証しようとする。その他に、本翻訳では、十字軍の歴史をタッソが脚色して『エルサレム解放』を描き、その地誌をシャトーブリアンが検証するという論考を扱うことで歴史と集合的記憶の違いが取り上げられる。

---

キーワード：アルヴァックス、集合的記憶、聖地、福音書、伝説地誌

### 訳者解説

本邦訳は、Halbwachs, M., *La topographie légendaire des évangiles en Terre sainte : Étude de mémoire collective*, 2éd., Presse Universitaires de France, [1941] 1971, p. 125-136 を訳出したものである。同書『聖地における福音書の伝説地誌』の第9章 結論の一部分にあたる。

先行する結論部分〔*ibid.*, p. 117-125〕では、福音書が、イエスの生涯を目の当たりにした弟子たちの記憶の再現だけでなく、その後のキリスト教集団が修正を加え、補完しながら守った集合的な記憶〔*souvenir*〕である、と論じられている。そこでは、弟子たちの直接的な経験が不安定で漠然としている個人的記憶〔*mémoire individuelle*〕であるのに対して、イエスの死後にキリスト教集団において伝承を蒐集することが集合的記憶〔*mémoire collective*〕であると示唆される。その上で、イエスを想起させるのは、この弟子たちだけが知る場所なのではなく、その聖なる場所に根付いた信仰と教義であると論じられる。

これに続く本翻訳で、アルヴァックスはキリスト教信仰を集合的記憶として仮定していると考えられる。ここでは、聖なる地エルサレムがイエスの活躍によって書き換えられ、そこから拡大して

---

\*基礎総合教育部

論文受理日 2023 年 7 月 1 日

\*\* 関西大学

いくキリスト教の礼拝や教会、そして信仰を、集合的記憶として繰り返し説明していると考えられる。

現下の集合的記憶研究において、場所や空間の重要性が指摘されることがある。それは集合的記憶が場所に刻まれ、その場所においてより詳細に想起されるといったような研究である。しかしながら、そのような集合的記憶がこの翻訳で明らかになるわけではない。

また、歴史的事実を踏まえた文学作品が集合的記憶とは異なると思われる箇所も含まれる。それは、シャトーブリアンが、イタリア詩人タッソが著した『エルサレム解放』に描かれた場面を実際に探訪し、その場所を正確に位置づけようとしたことから窺える。このシャトーブリアンによる文学的探訪は、十字軍の歴史に虚構を織り交ぜ書かれたタッソの作品を記憶ではなく、歴史であることを説明するために用いられている。つまり、集合的記憶の反証として『エルサレム解放』が扱われたと考えられる。

本稿では、シャトーブリアンからの引用が多く、読みやすさを考慮して、この引用部分の配置は原文と換えた。本稿に続く結論部分は再び福音書についての集合的記憶研究が展開されている。

〔横山寿世理〕

## 凡例

- ・（ ）はアルヴァックス自身による翻訳と原註を示し、〔 〕は訳者らによる補足や注釈、訳者註である。……は中略を示す。原文の——は、読みやすさを考慮し、訳文では省略もしくは追加した。
- ・アルヴァックスが引用した著作に関しては可能な限り照合を行い、その著作の情報を訳註に記した。

## 第9章 結論（2）

キリストが通過した場所についての記憶〔souvenirs〕と同様に、キリストの生と死についての記憶が後世に残りうるためには、それらの記憶は教義——それ自体で存続可能かつ広範な集団の中に息づいている観念——に結びつけられねばならなかった。贖罪という抽象的な観念が単なる願望に留まらず、歴史的次元の真理〔vérité d'ordre historique〕や経験的事実として信じられるためには、生きた伝統と人間の証言を後ろ盾にしなければならなかった。一方には、形而上学的内省に没頭したパウロがおり、もう一方には、伝道者の集団やエルサレム出身の証人たち、皮肉ではなく大伝道者たち〔archi-apôtres〕とパウロが呼んだ人々がいた。贖罪の観念とこれらの記憶は、ちょうどよい時期にうまく交わることができた。贖罪の観念は、人物と場所のイメージに満ちてははずであった。また、記憶〔souvenir〕を彩る特徴を備えており、その特徴によって、その記憶は〔人々

の] 記憶作用 [mémoires] において存続することが可能となっていたはずである。事実に関して言えば、それらは深まりを見せていき、いくつかの事実は他のものよりも奥行きがあった。おそらく、それらの事実は、時間と空間を超え出ることはない。だがそうであるにせよ、少なくとも限られた領域の時間と空間——そこでは、弟子たちの記憶力 [mémoire] によってそれらの事実が位置づけられていた——を、超え出る傾向を持っている。というのも、それらはかなり古い事実と結びついているからである。それらの事実は、旧約聖書から伝えられた別の複数の出来事の中であらかじめ示されており、予言者たちによって予言されていた。

したがって、出来事から離れていくにつれて、教義はイエスの歴史 [histoire] を根底から変更したのである。人々がエルサレムについて抱いていたイメージも教義によって変更されたことは、驚くことではない。聖なる場所 [lieux saints] は、イエスが活躍した舞台であっただけではなく、神聖化された場所でもあった。なぜなら、キリスト教の本質的な真理は、信者たちの考えをそれらの場所へと向け直すからである。こうした変更は徐々になされたはずである。弟子たちやイエスを知っていた人々は、(何らかの根拠を持つ歴史が重要になることを認めてはいたのだが) しばらくの間は、イエスの人となりをもっとく忘れることはなかったし、イエスのことを頻繁に見聞きした様々な場所にイエスを結びつけていた。だが彼らは、礼拝が入念に行われていた初期の集まりにおいて、勢力を拡大したキリスト教集団と心の中で一体化する際、信者たちが崇めた場所に最も重きを置き続けた。というのは、彼らはイエスの神性がそこに顕現されていると信じていたからである。

このように [場所を] 移され、拡大した集合的記憶 [mémoire collective] の中で練り上げられることで、キリスト教の記憶 [souvenirs chrétiens] は、礼拝を喚起する神聖化された場所を特に対象としていた。イエスの聖性を除けば、礼拝の場所は、空間において定められた位置を持つ大地の一部分である。あらゆる物質的なものと同じく、この位置はそのままで留まろうとする。聖化された場所の周辺で人々を引き留める力の働きについて、私は何も知らない。

しかし、場所がこの役割を果たすためには、いくつかの個人的な記憶 [souvenirs individuels] がその場所に結びつけば十分というわけではない。この場所が聖なる場所 [lieu saint] へと変容し、その場所の内部にある慣性力 [force d'inertie] が、その場所の外側へと、すなわち [場所の外側の] 人々の意識世界へと顕現するのは、礼拝が組織化された日から、つまりすべての信者集団がこの場所に集まるようになる日からである。そこに出発点があり、それより前に遡ることはほぼ不可能である。キリスト教の礼拝が制度化される以前は、弟子たちの集団はキリストの文字通り人間としての生涯についての伝承を保持していたのであろう。すなわち、彼らの主、仲間、友として思い描かれたキリストの伝承を保持していたことになる。しかし、この最初の伝承と、キリスト教の宗教的共同体において具体化した伝承とが、どのくらいの間隔で切り離されているのかは分からない。また、どんな要素が互いに浸透しえたのか、それらがどんな再編を被ったのかも分からない。

まず初めに、キリスト教共同体が公式に承認されておらず、抵抗と迫害にあっていた時代があっ

たはずである。キリスト教共同体にとっては、どの別の時期よりも、自らの歴史の初期の記憶を保持することが重要であった。ローマ律法の社会と同じく、当時の厳格なユダヤ教社会においては、キリスト教共同体に居場所はなかった。したがってキリスト教共同体は、何としてでも直近の過去と結びつかねばならなかった。だが他の何にもましてそうであったのは、共同体の記憶で満たされたこれらの場所である。実際に、ユダヤ教や〔キリスト教にとっての〕異教徒の主張と強く対立する彼らの信仰、生活や社会についての彼らの考え方、そして、自らが構築した黙示録的で超自然的な見方を持つ世界によって、キリスト教思想は、彼らがそのただ中へと編成されようとしていた諸集団と、物の見方において激しく対照をなしていたのである。この集合表象は、エルサレムの生活や異教徒の生活のどんな要素にも基づいていなかった。ある特定の記憶〔*mémoire*〕が土地のいくつかの地点に結びつかなかった場合、はたしてその記憶は持続できただろうか。これらの場所は、過去においても、現在においても実在した。これらの場所があるがゆえに、超自然的な様相というものがあるものであったとしても、イエスの生涯はイメージの世界の中に現れていた。そしてこのイメージの世界は幻影ではなく、慣れ親しまれたものであり、万人によって受け入れられ、この時代のお決まりの生活の中に取り入れられていた。黎明期のキリスト教信仰の敵がこれらの場所〔の姿〕を歪め、これらの場所〔の存在〕を認める助けとなっていた目印を破壊しようとしていたというのは、信じられないことというわけでもない。人々に語られているところによれば、キリスト教徒たちがそこに集まるのを妨げるために、皇帝はカルヴァリの地に異教徒の神々へ捧げる聖なる木を植えさせたという<sup>(1)</sup>。したがって、かつて動乱の中にあった大都市において〔皇帝は〕命令による支配を行うことで、暴動の発生源となった地区や、革命闘争の本拠地を破壊した。そして、そこに大通りを布き、巨大な公的建築物を建設して、自らの意に沿わない記憶を消し去ろうとした。

キリスト教信仰が発祥地以外で広まらなかったと仮定してみよう。この仮定からすると、キリスト教の宗派は最初そうであったままに留まっているだろう。すなわち、昔のユダヤ社会のごく小さな一部分にすぎなかったということである。昔のユダヤ社会は、キリスト教の宗派を封じ込め排除しようとしていた。また、キリスト教的な事実についての物質的痕跡が消え去るにつれて、キリストの歴史は急激に忘れ去られてしまっただろう。だが一方で、福音書にあるような出来事の物質的な痕跡がすべて消し去られていたわけでない可能性もある（仮にこれらの出来事が起こったとしてであるが）。荒廃した家屋や通りの石材が残っていたし、建物の構造も残っていた。これらのものが無に帰され、よそに移されてしまうことはなかったかもしれないのだ。完全に覚えてしまうことのできない場所や跡地の名前があった。言ってみれば、集団は自らが生きた場所の形を手に入れるのだ。長い不在の後で（エルサレム再建後の、ユダヤ人やキリスト教徒立法主義派のように）その場所に戻る場合、さらには、場所が姿を変えてしまった場合でさえも、自らがその痕跡を保持してきた物質的な枠組みを、集団はその場所で部分的に探し見出すのである。

他方では、とりわけ伝道者たちや初期キリスト教徒たちによる予言が原因となり、キリスト教信

仰は早くから普遍救済的な宗教の様相を取っていた。オリエントの様々な都市において生まれたキリスト教集団の信仰において、聖なる場所のイメージは最も重要なものであったはずである。たとえば、パウロや、彼に同行した人々、そして、聖都やその周辺についてはまったく記述しなかったけれどもキリスト教の信仰をパウロと同じように遥か遠方で布教した弟子たちは、イエスの時代の場所〔lieux〕の様子について何らかの観念を与えてくれる。このことと、これらの共同体において本質的なものが記憶に留められてきたことは、人々の認めるところであろう。したがって、イメージは不完全なものであり、おそらくは単純化されたものである。重要なことは、イメージがこれらの集団の記憶〔mémoire de ces groupes〕、とりわけ拡大した教会の記憶の中に留まっていたということである。というのも教会は、規模だけでなく一貫性も手に入れており、より強固な形で当時の社会の中に定着していたからだ。実際にキリスト教信仰は、これ以後はもはや、正統な社会の枠組みから排除された局地的な宗派の信仰や伝統ではなくなっていた。あらゆる社会階層の家族、公職にある人物たちを自らのもに引き寄せるにつれて、すなわち、影響力のある人々や集団の信仰を得て、これらの枠組みを修正しキリスト教精神を浸透させるにつれて、キリスト教信仰はさらに空間の中で拡大していった。最初は迫害され次に黙認されたキリスト教共同体が公的な組織となり、古代ローマの組織の中に溶け込む時代が到来したのである。

では、聖なる場所とその公認をめぐる問題は、いかにして提起されるだろうか。一方では、複数の特定の場所にイエスが現れ活動をしたという局地的な伝承がいくつか存続しえた。だがそれらの伝承はきわめて曖昧なものであり、断片的で不確かなものであった。というのは、何世紀にも及ぶ時間が流れたからである。十分に定まった指標〔points de repère〕が欠けていたことで、多くの混乱が生じえたし、生じていたはずである。場所について推論〔raisonner〕<sup>[3]</sup>した途端に、誤りが生じる可能性があるのだ！世代を経るにつれて、記憶が正確さを獲得するというわけではない。むしろ正反対である。

だが一方で、普遍的なキリスト教共同体が徐々に作り上げてきた聖都のイメージというものも存在していた。イエスと彼の最初の弟子たちの足跡が残された場所を記念するために教会や礼拝堂が建設された際に、局地的な伝承（もしそれらがまだ存続しているとしてだが）を改変することによって、普遍的なキリスト教共同体がそれらの伝承の大部分を覆い隠し同化したというのは、自然なことである。したがって、これらの伝承のいくつかは忘却を免れたののだが、それ以外の伝承は完全に消し去られてしまったのである。しかしながら、集合的な記憶〔souvenir collectif〕は常に二つの対象を持つことになる。一方は物質的な実在——像、モニュメント、空間の中の場所——であり、他方は象徴——精神的な意味として、集団の精神の中で物質的な実在に付随し重なり合うもの——である。集団が分裂したと仮定してみよう。集団の成員の何人かはその場所に留まり、物質的な対象と向かい合い接触している。他の人々はその場所から離れるが、その物質的な対象のイメージを携えていく。だが一方で、対象は変化する。周りのすべてが変化している以上、その対象が占める



場所ですら同じままではなくなっている。その対象を取り巻く物質的世界のさまざまな部分との関係が、もはや同じものではなくなっているのだ<sup>(2)</sup>。確かに、エルサレムに留まったキリスト教徒たちの心の中で、聖なる場所の象徴的な意味が前景化していたとすれば、原初のキリスト教徒たちの姿についてのより正確な記憶を保持できただろう。しかし、彼らにとってのエルサレムとは、とりわけ天のエルサレム〔Jérusalem céleste〕——天と地の間に位置するエルサレム——だというわけではない。彼らにとってのエルサレムとは、石によって建てられた都市であり、彼らにとって親しみのある家や通りである。つまり、彼らの記憶が持続することを説明するのは、これらの物〔choses〕の安定性なのである。ところで、この安定性は、都市を徐々に変化させ消滅させる物質的な偶発事すべてに左右される。有機体を破壊し変化させる生理学的な偶発事によって左右されて、そばで生活する人についての記憶が編成・再編成を繰り返すのと同じことである。変化が目立たないのは、ゆっくりと継続的に生じるからである。また、その変化が大きく突然であっても、感じ取れないほど素早く、習慣が元のままのものへと回復させてしまうからである。

これらの場所から離れ再訪することもなく、これらの場所の変化の全局面に立ち会うこともなかった成員たちは、すぐに象徴的な表象を作り出している。おそらく、彼らがこれらの場所について喚起するイメージは、(そのイメージが記述に依拠しているのだとしても、少なくとも間接的な仕方)で第一にこれらの場所それ自体からその内容を引き出している。だが、象徴的な〔次元での〕内省は、物質的にこれらの場所を取り巻いているもの〔entourage〕から、これらの場所を引き離してしまう。そして、これらの場所を集団の信仰〔croyances〕とだけ関係させる。おそらく、信仰の持続を説明するのは、イメージの安定性なのである。だが、イメージがイメージとしてそれ自体で存続する以上、そして、物質的な偶発事を人々がまったく認識できない以上、この安定性は、その対象を変化させる物質的な偶発事に左右されることはない。パレスチナを離れたキリスト教徒たちは、自らが遭遇することのなかった現実〔réalité〕が彼らの虚偽を暴露する矛盾を恐れずに、エルサレムのことを自由に喚起することができた。そのイメージが適用されるようになっていたのは、現実の場所ではなく、これらの信仰だったからである。ところで、それらの〔現実の〕場所が〔彼らの心の中から〕消え去っていく一方で、信仰は強化されていった。自らにその運命を委ね、他のキリスト教共同体に頼ることもなかったエルサレムのキリスト教徒たちは、完全に変化してしまった地域の枠組み〔cadre local〕の中に福音書の歴史を置き直すことに、ますます苦勞するようになっていた。また、出来事の記憶もまた、消え去る危険にさらされていた。その一方で教会は、自らに合わせて作られた教義の枠組み〔cadre de dogmes〕——そこでは、同時代の社会の最も生き生きとした信仰が表現されていた——の中に、同じ歴史を置き直していた。それゆえ、エルサレムに戻ったキリスト教徒たちが、イエスの受難があった都市を、イエスの時代そのままの姿で見出せると信じていたとしても、それは驚くようなことではないのだ。

\*\*\*

ここまでの議論では、福音書の中で語られた出来事が現実であるという前提で話を進めてきた。後に書かれたものではあるが、これらの物語が口述の伝承に基づくこと、それらが私たちに与えるイメージは歪曲され混乱しているが、ある程度は出来事それ自体の真正なイメージであったことを、私は〔ここまでの議論で〕認めてきた。おそらくこうした見解は、ルナンが身を置いたものと類似している。というのも、彼の目に映るパレスチナにおいて福音書の出来事が自然な形で置き直されていたことと、それらの場所についての個人的かつ直接的な見方が彼にもたらした現実の印象と、歴史的な現実についての印象とに、どれほど自分が感動し驚嘆したのかを、ルナンは自分自身に語っていたからである。〔確かに、〕イエスの生涯や死について様々に予期しなかった出来事をそこに位置づける目的で、ルナンはガリラヤやユダヤ地方やエルサレムを訪れた。だがその時、歴史小説家や詩人と同じく、ルナンはとりわけ自らの想像力に囚われてはいなかっただろう。

シャトーブリアン〔François-René Chateaubriand〕は『パリからエルサレムへの旅程』の第5部冒頭で、「10月のある朝早く、タッソ〔Torquato Tasso〕の名を後代に残した戦場を調べるために、アリという信者とずっと一緒に、エフライムの門を通してエルサレムを出立した」<sup>〔4〕</sup>と述べている。おそらくは最も自然で真摯な熱狂が生じた場所であるエフライム門について12ページが割かれていて、聖地パレスチナに費やされた複数の章において、巡礼者の物語は新たな展開を見せる。聖墓、ヴィア・ドロローサ〔苦難の道〕、修道院と修道士たちのことを、シャトーブリアンは忘れている。イエスの最後の日々や受難ではなく、エルサレム解放の英雄的で感動的なエピソードのうちで主要なものの枠組みを、彼はその場所に見出そうとしているだけだ。

ここで、こうした地誌的かつ小説的な夢のエピソードのいくつかを再現したとしても、読者は許してくれるだろう。

「エレミアの洞窟と王の墓の間にある都市の北に到着して、私〔シャトーブリアン〕は『エルサレム解放』を開いた。そして、私はその場に立ち、タッソの叙述の迫真性に驚愕した」<sup>〔5〕</sup>。タッソはこう述べている。

ソリム〔Solime〕（これはエルサレムのことである）は二つの丘の上にあり、互いに向かい合っている…。外側には乾いたむき出しの大地しか見えず、大地を潤す泉や小川も見あたらない。花が咲くのも決して見られない。大きな木陰を持った木も育たないので、太陽の日差しからの逃げ場を作ることもない。ただし、600マイル以上離れると、不吉な陰を持つ森がそびえ立っており、恐怖と悲しみを広げている<sup>〔6〕</sup>。

シャトーブリアンの描写は、鮮明で明確で正確なだけである。

……野営地から600マイルの位置にあり、アラビア半島の側にある森は、詩人によるまっ

多くの作り話とは言えない。ギヨーム・ド・ティール〔Guillaume de Tyr〕はタッソが多くの傑作〔merveilles〕を生んだ森について語る。ゴッフレード〔Godefroy〕はその森で兵器を組み立てる梁や根太をそこで探した<sup>(3)〔7〕</sup>。……アラディーノ〔Aladin〕はエルミーニア〔Heriminie〕を伴って二つの門の間に立てられた塔に座って、平原での戦いとキリスト教徒たちの部隊を見定めていた。この塔は、他のいくつもの塔を伴って、ダマスкас〔Damas〕門とエフライム門の間に現存する。

この塔はとりわけシャトーブリアンの想像の中では、塔の影と森の幽霊として存在している。

ヨシャファトの谷<sup>(8)</sup>の最北端に向けてエルミーニア〔Herminie〕<sup>(9)</sup>が脱出した見事な場面を挿入しよう〔このアンティオキアの王女は、クロリンダの武具を身に着けて〔クロリンダに扮して〕、城門を越え、傷ついたタンクレーディを助けに向かった〕。タンクレーディを愛する人〔エルミーニア〕は忠臣を伴ってエルサレムの城門を越えて、小さな谷の奥深くに入り、斜めに傾いた険しい道を遠回りしながら進んだのであった（第6歌96連）<sup>(10)</sup>。したがって、エルミーニアはエフライム門から出発したのではない。この門から十字軍の幕営まで続く道は、完全に〔十字軍側に〕併合された土地を通過するからである。彼女は、疑われにくく、警備の手薄な東の門から逃れようとしたのであった。<sup>(11)</sup>

エルミーニアは奥深く寂しい場所——*In solitaria et ima parte*——に辿り着いた。彼女は止まって、従者をタンクレーディのところへ使いに出した。この奥深く寂しい場所は、街の北側の隅に向かう際に、ヨシャファトの谷の高いところで非常に目立っていた。そこで、エルミーニアは安全に使用者を待っていることができたはずだが、忍耐強くいることができなかったのも、高いところへと上り、遠くのテントを見つけた……このようにして、驚嘆すべきこれらのスタンス〔同型の詩節からなる悲劇的抒情詩〕が生まれたのだ……。<sup>(12)</sup>

評価すべきでもあるのは、シャトーブリアンがこれらの場面をある程度正確に位置づけている〔localiser〕ことである。というのも、タッソにおいては、これらの場面の枠組みがきわめて曖昧にしか描かれていなかったからである。

だが続いて、軍隊（彼らは白い衣服を着ており、兜には銀の虎がきらめいてる）へと反射した光線が、アルカンドロ〔Alcandre〕とポリフェルノ〔Polipherne〕の注意を引く場面になる。この二人の兄弟の父親は前線の警備隊を指揮していたが、クロリンダによって殺害されている<sup>(13)</sup>。「アルカンドロとポリフェルノは王たちの墓の辺りに場を陣取っていたはずである」<sup>(14)</sup>。タッソを読み直すために、シャトーブリアンは王の墓のすぐ近くに身を落ち着けた。そこは彼が前日に長いこと見



物をしていたところであり、多くのページを〔王の墓の記述に〕費やしている。それゆえ、まず間違いないことだが、この場所は詩のいくつかの出来事に装飾を施す上で役立ったのである。シャトーブリアンはこう付け加えている。「タッソがこれらの秘められた住居を描かなかったのは悔むべきである。彼の才覚からすれば、同じようなモニュメントについて描写するのも当然だったからである」<sup>[15]</sup>。

もう少し続けよう。「逃走中のエルミーニアが川岸で羊飼いと出会った場所を特定するのもまた簡単なことではない」<sup>[16]</sup>。純粋な虚構(第7歌冒頭の羊飼いたちと共にいたエルミーニアのエピソード)が問題になっていることに注目してほしい。歴史的事実を位置づける〔localiser〕のと同じくらいの真剣さで、シャトーブリアンはその虚構の中の場所を探しているからである。「しかしながら、この国には川は1つしかない……。タッソがその川を名付けなかったとは考えにくいということは認めておこう」(それどころか、タッソはその川を名付けている。〔第7歌〕第3連「美しきヨルダンの清き流れのほとりに辿り着いた」)。

魔女アルミーダが誘惑した騎士たちを閉じ込めた湖や城について、タッソ自身はこの湖が死海であると明言している。——そこは、かつて空からもたらされた火が罪深い4つの都市を焼き尽くした場所である。……水が黒く干上がるほどであろうと、最も頑健な部隊はそこで生き残った。<sup>[17]</sup>

ここにおいて、私たちは超自然的なもののただ中にいる。それでもやはりシャトーブリアンにとっては、それが生じた場所を特定することが必要だったと思われる。

この詩連の最も美しい箇所の1つは、ソリマーノ<sup>[18]</sup>によるキリスト教徒たちの幕営への襲撃〔地獄から嵐が吹き荒れ、天使と悪魔が参加した戦い…〕である。敗北したソリマーノはたった1人でガザへの道を歩むことになる(第10歌)。「魔術師」イズメーノはソリマーノと出会い、戦車の上に彼を登らせ、その周囲を雲で覆った<sup>[19]</sup>。2人は一緒にキリスト教徒の幕営を横切り、ソリムの山へと辿り着いた。しかも驚くべきことに、このエピソードは、ヤッファ門もしくはベツレヘムの門近くのダビデの城砦までの複数の地点と合致しているのである。しかし、残りの部分については誤りがある。この詩人〔タッソ〕は混乱していたか、ダビデの塔とアントニアの塔との混同を楽しんでいたのである。アントニアの塔はそこから離れたところ、その都市の下部、寺院の北の方角に建てられていた。<sup>[20]</sup>

以上は、ソリマーノとイズメーノが辿った道によるものである。彼らは何にも妨げられることなく、西側からその都市を一巡し、古くからあるテュロポエオン峡谷を通り過ぎ、アントニアの塔へと到

着した。彼らは雲に覆われていたので、都市の中に入ることができた（彼らがキリスト教徒の幕営を通過できたのと同じである）。

オリーブ山への礼拝行進〔procession〕は歴史的なものである。それは匿名作家、ロベール・モワース〔12世紀の歴史家、十字軍の年代記を執筆した〕とギヨーム・ドゥ・ティール〔ティールの大司教。歴史家〕によって語られている。ここで再び小説の中へ入っていこう。

間もなくタンクレーディとクロリンダの凄まじい戦いが始まるが、この戦いはある詩人の脳から生じた最も感動的な空想である。その場面の場所を見つけるのは容易である。クロリンダはアルガンテ〔Argant〕とともに黄金門を通して帰れなかった。それゆえ、彼女はシロアム溪谷にある寺院に留まった。タンクレーディは彼女を追った。そこで戦いが始まった。死にゆくクロリンダは洗礼を望んだ。タンクレーディは近くの泉に水を汲みに行った。この泉から、その場所が明らかになったのである。それはシロアムの泉、というよりマリアの泉と言った方がよく、シオン山の麓から湧き上がっている。<sup>[21]</sup>

私〔シャトーブリアン〕は、猛将アルガンテが勇敢なタンクレーディに殺された場所を<sup>[22]</sup>、まず特定することができないだろう。しかし、西から北に広がる谷にその場所を探さなければならぬのである。タンクレーディに包囲された隅の塔の東に、その場所を位置づけることはできない。というのも、エルミーニアはヴァフリーノ〔Vafrin〕<sup>[23]</sup>とともにガザから戻った際、傷ついた勇者〔アルガンテ〕に出会ってはいなかったからである。<sup>[24]</sup>

シャトーブリアンは次のように結ぶ。

私は、タッソの戦いの現場を調査するのに5時間を要した。戦いの現場は土地の半リユー〔2キロ〕も占めていなかった。また、その詩人〔タッソ〕は、彼が舞台とした様々な場所をきわめて鮮明に描いていたので、それらの場所を見分けるのに一瞥すれば十分であった。<sup>[25]</sup>

タッソによる聖地や聖墓への訪問にまつわる荒唐無稽な物語を、〔シャトーブリアンは〕現地で想起したのである。フェニキアへの伝道に関して、ルナンも同じく、福音書とは別のこの物語の場所や枠組みを探すことをまったく好まなかったのだろうか。

その上、タッソによって語られた出来事は私たちが遡ることができる十字軍の歴史と多くの点で一致している以上、それらの出来事に検証できる歴史的事実が欠けていることには決してならない。シャトーブリアンはこう述べている。「自分で十字軍の歴史を翻訳しようとした時に、タッソがそれらの原典をどれほど深く研究したのかが分かるだろう」<sup>[26]</sup>。——しかし、福音書の物語について

言え、彼ら〔タツソやシャトーブリアンやルナン〕が語る出来事が生じてから1世紀経った後では、それらの出来事の大部分に触れた文書も証言も皆無である。

タツソは登場人物たちを歪曲して描き、人物像を誇張し、実際の出来事に多くの虚構を混ぜ合わせてしまっている。けれども、その詩の中に実在の人物を登場させ、確実に起こった出来事について語っている。当然のことながら、こうした想像上の歴史〔histoire imaginaire〕全体が歴史的な出来事に基づき構成されている以上、それは歴史の物質的な枠組み〔le cadre matériel de l'histoire〕の中に置き直される。つまりこの想像上の歴史全体は、歴史小説というよりむしろ、小説風に描かれた歴史なのだ。

しかし、福音書の物語については事情が異なる。福音書が私たちに語る事実は、歴史家の注意を引きはしなかった。ヨセフスはこのことについて何も語らない。ルナンによれば、マルコによる福音書の中に見出される洗礼者ヨハネの死の物語は、「蒐集されたすべての福音書の中に存在していた、完全に歴史的な唯一のページ」<sup>[27]</sup>であろう。本物のパウロの手紙の中で彼が私たちに語っているのは、神の子が地上に現れ、私たちの罪を贖って死に、復活したということだけである。（証言によってではなく）幻〔vision〕によって知ったとパウロが私たちに語る主の晩餐〔Cène〕以外には、〔パウロの手紙の中には〕イエスの生の状況を暗示するものはない。また、場所の指示〔indication〕もない。ガリラヤや、ゲネサレト湖畔でのイエスの伝道も問題となっていない。パウロの手紙に依拠しながらクシュ〔Couchoud〕氏が述べるところによれば、ヨハネの黙示録の中には、「確信をもって1世紀だと推定しうるキリスト教の唯一の文書」がある。すなわち、イエスについて私たちに語られたことのすべてがあり、それは「イエスが苦しみ十字架にかけられたことではなく、死んで復活したことである」。またお分かりのように、〔パウロの手紙の中では〕場所の特定〔localisation〕もされていない。

それゆえ、「1世紀に黙示的な啓示であった福音書は、2世紀になって伝説の形で語られるようになった」という命題が導かれる。宗教や超自然的なものの領域へと精神を導く神秘主義の信念〔croyance〕すなわち直観〔vision〕は、人間の地平で展開する一連の出来事へと転換・変容した。しかし、それらの出来事は別のところでは超越的な意味を有していた。救世主〔イエス〕が現れ、死に、復活したことを認めることを拒絶していたユダヤ人たちに対しては、見ること・証明することのできる出来事のみで事実の証拠をもたらすことによって応答がなされた。だが、その神話に置き換わったこの歴史は、後になって想像されたものであり、超自然的な神秘が生じたはずの時点で、過去の中へ投影された。

出来事それ自体へと遡るような真正な伝承を、この歴史は排除している。それゆえ、これらの出来事は起こらなかったと考えられている。だが、書かれる前にこれらの虚構の物語が取ったであろう最初の形式、すなわち口述形式の伝承は、この歴史によって排除されていない<sup>(4)</sup>。さらに、あらゆる命題が検討される。〔たとえば、〕言い伝え〔traditions orales〕をどの時代に遡るのか。それ

らに到達することもできず、どの時期に形成されたのかも特定できない場合に、それらは真正なものか否か。これらのことを決定するどのような方法を私たちは持っているのか。——いずれにせよ、この仮説、福音書が想像的な物語だとする仮説を退けることのできるどんな真正な文書も存在しない以上、福音書に基づく場所の特定に関して言えば、これら想像的な物語から生じたように見えるものを検討しなければならない。

福音書の構成についての研究へと入り込むことなく言うことが可能なのは、福音書の中に挿入された物語は大体、パレスチナのそれぞれははっきりと異なる2つの地域、ガリラヤとエルサレムに関連しているということだ<sup>(5)</sup>。ガリラヤでは、山上での説教〔le sermon sur la montagne〕を中心として、ゲツセマネ湖畔を舞台としたであろう説教や奇跡も含んでいる。エルサレムは主にキリストの受難に関係している。一方には言説〔discours〕、とりわけたとえ話〔paraboles〕があり、もう一方には諸事実、諸々の行為や出来事がある。その上、それらの事実や行為や出来事だけが、人間という平面の上で、キリスト教信仰の源泉である神秘的な惨事を展開している。多かれ少なかれ、たとえ話はこの惨事に左右されていない。さらに付け加えると、出来事にとって、場所を特定することは本質的なことである。なぜなら、エルサレムという場所でしか、救世主は捕らえられ、裁かれ、十字架にかけられ、復活しなかっただろうと思われるからだ。つまり、対応する複数の場所の間で、適切に明示しなければならなかった諸関係があったはずである。したがって、こうした場所の特定は、はっきりと定められた空間的な枠組み〔cadre spatial〕の中で理解される体系を形成していた。たとえ話や言説、奇跡については、事情が異なる。それらは必ずしも、ここやあそこというように位置づけられはしないからである。さらに〔たとえ話や言説、奇跡の〕多くは、きわめて曖昧なやり方——ガリラヤとか、その湖畔とか——でしか場所の特定ができないか、まったくできないのである。

#### 付記

本翻訳は、JSPS21K01909ならびにJSPS22H00904の成果の一部である。翻訳にあたって、柳田洋夫氏（人文学部）ならびに松本隆志氏（関西学院大学）に助言をいただいた。

#### 原註

- (1) パウリンへの手紙<sup>(1)</sup>の中で、ヒエロニムスは以下のように書いている。「ハドリアヌス帝の時代からコンスタンティヌス大帝の治下まで、約180年間、キリストの復活の場所で人々はユピテル<sup>(2)</sup>の偶像に礼拝した」(Abel et Vincent, p. 886)。しかしながら、アベルとヴァンサンは以下のように述べる。「巡礼者たちがオリブ山に登り、彼らが赴いたベツレヘムでは、アドニス崇拝の介入にもかかわらず洞窟に入ることができた。そうである以上、カルヴァリの丘以外の地点など想定されていないし、巡礼者たちがそこに赴くのを妨げようとした者もいなかったのだ。ところが、ある障害が、彼らの信仰心を満たすことの妨げとなっていた。異教の祭壇が現前しているよりも、完全に隠されていることが、障害となったのである」(p. 900)。カルヴァリの丘の跡地に聖なる木が設置されたという事実は、この場所の記憶を人々が失ったことを説明する上で仮説のままに留まっている。

- (2) 復興に伴って、エルサレムは実際に場所を変えた。エルサレム〔の範囲〕は北側へと拡張していき、新たな城壁の中に北西の全部分——さらに後にゴルゴタの丘と聖墓が置かれることになる場所——を組み入れた。だが反対に、南側の通りの壁の外側、特に高い丘の部分——高間が位置づけられることになる場所——は、そのままにされていた。このことから説明されるのが、その時まではその都市の外側にあった聖墓の通りが、ほぼ中心となったことである。
- (3) 十字軍が新たな兵器を作るのを妨げるために魔術師イズメーノ〔Ismen〕が魔法をかけるのは、その森である。タンクレーディ〔Tancrède〕は、その森で、自分が切り裂こうとしていたイトスギの幹からクロリンダ〔Clorinde〕の悲嘆の声を聞いた。後に、リナルド〔Renaud〕はアルミーダ〔Armide〕の呪文から逃れ、魔法を解くためにその森の中へ向かうことになる。ミルトの木からアルミーダが姿を現した。リナルドはその灌木に襲いかかると、百本の腕を持つ巨人〔それぞれの腕に武器を持つローマ・ギリシア神話に登場する巨人〕になった。彼は巨人に打ち勝ち、妖術がすぐに解かれて、木材が直ちに確保されたのである。
- (4) したがって、ルナンによれば、ルカによる福音書（ルカは別名ルカヌスないしルーカス。マケドニアにおけるパウロの同行者。ローマ教会のメンバー。70年没）の3分の1は、マルコによる福音書にも、マタイによる福音書にも認められない。その大部分は言い伝え〔traditions orales〕から着想を得たようである。
- (5) このことがルナンを驚かせた。すなわち、『イエスの生涯』におけるパレスチナの二元性と呼ばれているものである。ルナンが着目したのは、「文書と場所の驚くべき一致」であった。

この一致がそこで言おうとしているのは、ガリラヤの牧歌がこの国とその住民の魅力的な性質によく適合していること、それとは反対に、受難という惨事が生気のないユダヤ地方やエルサレムの乾燥した雰囲気によく馴染んでいることである。しかし、これは単なる心象風景ではないか、と疑問に思う人もいるかもしれない……。文書と場所の一致が北パレスチナと南パレスチナの間に打ち立てた対照は、場所の光景にはほとんど由来していない。それゆえ、この一致は既にパレスチナへの旅に先立つ覚書の中、そして『賛歌の賛歌』の序論の中でも、この対照を形成していたのである（ALFARIC, *Les manuscrits de la « Vie de Jésus », 1939, p. xxix*）。だが実際には、こうした対照を示唆するには、文書を研究すれば十分であった。ルナンについてのテヌの興味深い注釈を参照されたい。

彼〔ルナン〕は私に、『イエスの生涯』の大部分を読んでもらった…彼はナザレの時代について、イエスの甘美で望ましい考えすべてを一緒にし、そこから悲しいものを遠ざけ、好ましい神秘的牧歌を作ったのだ。次いで別の章で彼は、あらゆる脅威や辛酸を書き入れ、それらをエルサレムへの旅と関係づけている……。ベルトロ〔Marcellin Berthelot, 1827-1907〕と私は彼〔ルナン〕に、それは伝説の場所に小説を置くことである云々と言ったが、無駄であった（ALFARIC, *loc. cit.*, p. LVII et LXI）。

## 訳註

- [1] ヒエロニムスはパウリンへの書簡において、次のように述べている。  
ハドリアヌス帝〔Adrien〕の時代からコンスタンティヌスの時代まで、つまりおよそ180年間、異教徒たちはイエス・キリストが復活したまさにその場所でユピテルの偶像を崇拝した〔Saint JÉRÔME, “Lettre à Paulin”, AIMÉ-MARTIN DE M. L. dir., *ŒUVRES*, AUGUSTE DESREZ, 1838, p. 534, <http://remacle.org/bloodwolf/eglise/ jerome/paulin.htm> <2023.06.15 確認>〕。
- [2] 70年のエルサレム陥落の後、130年に皇帝ハドリアヌスはエルサレム再建を宣言する。その新都市アエリア・カピトリーナの三守護神の一柱として、ローマの主神ユピテルが定められ、ユピテルの神殿が建設され、崇拝された（笈川博一『物語 エルサレムの歴史-旧約聖書以前からパレスチナ和平まで』中央公論新社 2010年 p. 104-105）。



- [3] 「推論」については、金瑛『記憶の社会学とアルヴァックス』晃洋書房 2020年 p. 80-89を参照のこと。
- [4] Chateaubriand, F. R., “Itinéraire de Paris à Jérusalem”, Sainte-Beuve, C. A. éd., *Œuvres complètes de Chateaubriand*, Tome 5, Garnier, 1861, p. 374. [https://fr.wikisource.org/wiki/Itinéraire\\_de\\_Paris\\_à\\_Jérusalem](https://fr.wikisource.org/wiki/Itin%C3%A9raire_de_Paris_%C3%A0_J%C3%A9rusalem) <2023.06.29 確認>
- [5] アルヴァックスの原文において《 》が閉じられていないが、閉じていると判断した。  
なお、タッソは『エルサレム解放』の第3歌55連においてエルサレムについての叙述を行っており、シャトーブリアンはこれを指していると思われる (Tasso, Torquato, “Gerusalemme Liberata”, *TORQUATO TASSO: Centro Libri per Mille Anni*, Istituto Poligrafico e Zecca dello Stato, 1998, p. 168)。
- [6] Chateaubriand, *op. cit.*, p. 374.
- [7] 『エルサレム解放』では、十字軍はイスラム軍に破壊された櫓や兵器を補うために、第13歌の場面で、この「サロンの森」に分け入ることになる (『エルサレム解放』訳302-336ページ)。その森には、魔術師イズメーノの策略が施されている。それを知らずに、この森へ工兵を派遣したのが、十字軍総大将で、ロレーヌ公、ゴッフレード・ディ・ブリーオーネ (フランス語ではGodefroi de Bouillon) である。『エルサレム解放』の登場人物の表記については、鷲平京子訳に準じるため、フランス語ではなく、イタリア語に近い表記となる。
- [8] 場所は定かではないが、エルサレムとオリーブ山との中のキドロンの谷と同一視される (秋山憲兄監修『新共同訳 聖書辞典』(第2版)新教出版社 2013年 p. 488)。
- [9] エルミーニアの父でアンティオキア王が、キリスト教徒軍に殺された時に、捕虜にされ、タンクレーディに身柄を拘束される。その時、エルミーニアはタンクレーディに恋をする。その後、アルガンテとの決闘によって傷ついたタンクレーディを助けるため、クロリンダに扮する [Tasso, *op. cit.*, p. 163-170, 191-202; A. ジュリアーニ編 鷲平京子訳『タッソ エルサレム解放』岩波書店 2010年 p. 77]。
- [10] タッソ『エルサレム解放』第6歌96連の内容は以下の通りである [Ibid., p. 200]。  
戦士の声と思われる女性の声の人が人を欺くのを容易にする (武器の使い方を知らない者が鞍上で武装しているのを誰が信じるだろうか) ので、門衛はすぐに従い、彼女はすぐに出てきて、彼女と一緒に行く護衛の二人も出てきた。そして彼らの護衛によって彼らは長い斜めの道を通りながら谷に降りていった。
- [11] Chateaubriand, *op. cit.*, p. 376.
- [12] Ibid., p. 376.
- [13] Tasso, *op. cit.*, p. 191-202 [鷲平訳 前掲書 p. 174-175]。
- [14] Chateaubriand, *op. cit.*, p. 377.
- [15] Ibid.
- [16] Ibid. なお、『エルサレム解放』第7歌において、クロリンダに扮したエルミーニアは、十字軍に襲われ、逃げる中で辿り着いたヨルダン川の川岸で牧人たちと出会う [Tasso, *op. cit.*, p. 203-205; 鷲平訳 p. 192-197]。
- [17] Chateaubriand, *op. cit.*, p. 377. 実際、タッソは『エルサレム解放』第10歌61連において、アルミーダの虜囚となった十字軍兵士たちが「辿り着いたところ」[giungemmo al loco] について、註を付け、そこが「死海」[Mar Morto] だと述べている [Tasso, *op. cit.*, p. 242, p. 391]。
- [18] トルコ人兵士で、デンマーク王子ズヴェーノとその軍を滅ぼした [鷲平訳 前掲書 p. 247]。
- [19] [ ] はアルヴァックス自身による補足。また、『エルサレム解放』第10歌 [Tasso, *op. cit.*, p. 236-41; 鷲平訳 前掲書 p. 276] を参照されたい。
- [20] Chateaubriand, *op. cit.*, p. 377-378.
- [21] Ibid., p. 378-379. また『エルサレム解放』第12歌46-72連 [Tasso, *op. cit.*, p. 267-260] が該当

する。

[22] 『エルサレム解放』第19歌8-26連 [Tasso, *ibid.*, p. 318-320; 鷺平訳 前掲書 p. 459-470]。

[23] タンクレーディの従者 [鷺平訳 同上 p. 472]

[24] Chateaubriand, *op. cit.*, p. 382-383.

[25] *Ibid.*, p. 386.

[26] *Ibid.*, p. 375.

[27] Ernest Renan, Calmann Lévy éd., *Les Évangiles et la seconde génération chrétienne, Histoire des origines du christianisme*, Lieu d'édition, 1877, p. 113-127, [https://fr.wikisource.org/wiki/Livre:Renan\\_-\\_Histoire\\_des\\_origines\\_du\\_christianisme\\_-\\_5\\_Evangiles\\_Levy\\_1877.djvu](https://fr.wikisource.org/wiki/Livre:Renan_-_Histoire_des_origines_du_christianisme_-_5_Evangiles_Levy_1877.djvu) <2023.07.01 確認>

Maurice Halbwachs, Chapter 9 Conclusion (2),  
*The Legendary Topography of the Gospels in the Holy Land*

Suzeri YOKOYAMA · Ei KIN

Abstract

---

We have translated the second part of the conclusion of *The Legendary Topography of the Gospels in the Holy Land* by M. Halbwachs into Japanese. Following the previous volume's translation, Halbwachs proved that collective memory was reconstituted by the Gospels of Matthew, Mark, Luke, and John, which directly referred to Jesus. They preserved the memories of Jesus and transmitted Christian beliefs and dogma. In addition, this translation includes the embellished history of the Crusades, *The Liberation of Jerusalem* by Tasso. While Chateaubriand showed the difference between Tasso's work and the topography of Jerusalem, Halbwachs showed the difference between history and collective memory because of it.

---

**Key words:** Maurice Halbwachs, Collective Memory, Holy Land, Gospels, Legendary Topography

Maurice Halbwachs, Chapitre 9 Conclusion (2),  
*La topographie légendaire des évangiles en Terre sainte*

Suzeri YOKOYAMA・Ei KIN

Abstrait

---

Nous avons traduit en japonais la deuxième partie des conclusions de *La topographie légendaire des évangiles en Terre sainte* de M. Halbwachs. À la suite de la traduction du volume précédent, Halbwachs a prouvé que la mémoire collective était reconstruite à travers les évangiles de Matthieu, Marc, Luc et Jean, où l'on retrouve une connaissance directe de Jésus. Ces évangiles conservaient les souvenirs de Jésus et transmettaient la croyance et le dogme chrétiens. De plus, cette traduction met en lumière l'histoire embellie des Croisades, *La Libération de Jérusalem* par le Tasse, et Chateaubriand souligne la différence entre l'œuvre du Tasse et la topographie de Jérusalem. Halbwachs argumente sur la différence entre l'histoire et la mémoire collective, due à cette différence.

---

**Mots-clés:** Maurice Halbwachs, mémoire collective, Terre sainte, évangiles, topographie légendaire